

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

進路指導は教師の醍醐味



教職16年目に
秋田高校に赴任
しました。1年
目はハイレベ
ルな教科指導に試行錯誤しまし

たが、授業に慣れてくると、進路指導にかかわりたいという気持ちが強まってきました。生徒に寄り添い将来をつくり上げる進路指導は、授業と同様に教師の醍醐味と考えていたからです。しかし、すぐにはその希望はかないませんでした。

赴任6年目を迎える直前、ある会合で進路指導主事の佐藤健公先生の隣に座りました。それまで佐藤先生と同じ学年になっ

「対話」こそが生徒を勇気付け 前進させることを理解した

秋田県立秋田南高校 庄司強

「生徒を優先する」ことは、多くの教師の信条であろう。だが、どのような局面でその信条を体現するかは、教師の個性によって様々だ。生徒との対話を最重視する先輩教師との出会いを通じ、庄司先生が自らの教育観を磨き上げ、血肉としていった日々を振り返る。

る機会もありませんでしたが、教師にも生徒にも厳しい先生というイメージは持っていました。その時、驚いたことに、佐藤先生から「後で発表になるけれど、来年は進路指導部の副主任になつてもらおうよ」と声を掛けられたのです。佐藤先生は常に学校全体のことを考え、全ての先生に目を向けられていました。そんな佐藤先生が「庄司先生を副主任に……」と、校長に直談判されたとき、光栄に感じると同時に、期待に応えたいという気持ちになりました。

対話を通じた信頼関係

「学校改革は進路指導から」が、佐藤先生の口癖でした。将

来の明るい話をする、生徒は前向きになり、学校が変わっていくというのが持論でした。その言葉通り、佐藤先生は分掌の仕事を驚くほど迅速に終わらせる、その他の時間を生徒と話すことに割いていました。先生の面談は、廊下で立ち話をしたり、ベンチで語り合ったりと自由なスタイルで、「20年後、君は何をしているだろうか」などと問い掛け、今すべきことを生徒に考えさせるのです。

佐藤先生は、添削指導も生徒との対話に活用されていました。毎日、数十人分のノートを添削して当日返していました。そのベースにあるのは「添削はカウンセリング」という考えでした。ノートを通して語り

掛けてくる生徒に対し、手書きの添削を通して語り返してあげると、生徒は見守られていることを実感し、安心して学習に取り組める。そんな考え方に感銘を受け、私もそれまで以上に熱心に添削指導に取り組むようになりました。

佐藤先生は、生徒の間では「厳しい先生」として通っていました。誰からも深く慕われていました。対話を通じた絶対的な信頼関係があったからこそ、どの生徒も厳しさを受け入れたのでしよう。佐藤先生の指導を通して、生徒たちの中に、将来への前向きな気持ちがあるのを感じました。やがて佐藤先生は異動になりましたが、その3年後、教頭と

先輩教師の言葉

パソコンを消して
職員室を飛び出し
生徒と語ってほしい

秋田県立秋田南高校 校長
佐藤健公



進路指導主事
事だった私は、庄司先生
の力が必要だ

と感じ、副主任に強く推薦しました。多くの教師が生徒の本音を引き出すのに苦労する中で、庄司先生は相手が気を許したくなる懐の深さを持ち、いとも簡単に生徒と心を通じ合わせているように見えました。「この先生がいれば、3人分の力になる」と思ったものです。そんな人柄ですから、授業で生徒を引きつけるのも実に上手で、若い数学の先生には「庄司先生の授業をのぞいてきなさい」とアドバイスしていました。庄司先生は私の期待以上の成長を見せてくれて、今は教育専門監として、秋田県全体でリーダーシップを発揮しています。

左 さとう・けんこう 英語科。秋田県立秋田高校、秋田県教育庁高校教育課などを経て、秋田高校で教頭、副校長を、角館高校で校長を務める。その後、秋田南高校へ。校長。

右 しょうじ・つよし 数学科。秋田県立大曲高校、秋田高校などを経て、秋田南高校へ。赴任3年目。教育専門監、進路指導部副主任。

撮影◎秋田南高校にて



して再び秋田高校に赴任されました。この時、私は進路指導主事でした。当時の秋田高校は生徒の能力に進学実績が十分に伴っていないということから、東北では「眠れる獅子」と言われ、その状況を抜け出そうとあがいていました。

佐藤先生は赴任早々、例年のおよそ倍の東京大10名、東北大50名という合格者数目標を掲げ、

自ら迅速に動き始めました。例えば、図書館の開館時間を延長してほしいという生徒の要望を聞くと、翌日には閉館時間を18時から19時30分に変更されました。そんな佐藤先生の姿を範として、私も自分が出来ることを考え、教師間の情報共有を充実させたり、個別試験対策講座を更に強化し、自ら複数のコースを担当したりしました。佐藤

先生や私の気持ちが進捗するよう、他の先生方も目標達成に向けて意欲的に行動し、成果に結び付けることが出来ました。幸運な巡り合わせで、現任校でも、佐藤先生は校長として、私は進路指導部副主任として一緒に仕事をさせていただいています。また、私は、秋田県の高

校に対して進路指導の助言をする教育専門監を兼務しています。が、ここでもお話ししている「生徒優先で考える」「100%の自信がなくてもまず行動してみる」は、どちらも佐藤先生の実践から私が学んだことです。そうしたポリシーに沿って行動した結果を分析し、素直に反省して改善することで、これまで私は成長してきましたし、今後もしっかり続けたいと強く思っています。

最近、リーダーシップを取ろうとしない先生が増えてくるように感じます。大きな責任を持つことを避けたいという気持ちがあるのでしょうか、誰かが動かなければ組織は変わりません。どんな組織でも、「変えたい」という気持ちを持つ人が3人いれば必ず変わります。特に若い先生方には、自分がその3人の中に入って、学校を改革しようという志を持っていただきたいと思います。

そして、せっかく教師になったのですから、パソコンにとらめっこばかりせず、他の先生と、生徒について語り合ってください。次に職員室を飛び出し、生徒と対話しましょう。教師の仕事は全てそこから始まります。

教師が忙しいのはどの時代も同じことで、この先も状況は変わらないでしょう。いかに業務を効率化し、生徒のために時間を割けるか。今も校長として、この課題に向き合っています。パソコンなどのツールを使いこなすことが得意な若い先生方から、ベテランにはない斬新なアイデアが積極的に提案されるようになれば、学校は大きく変わっていくはずですよ。